

探し物が見つからない、しかし、見付けられることを確信した。ナイトテーブルの中、電話の横にホテルの名前のつい紙切れがあった、そこに何か書かれている。スシはそれを書き留めると出て行った。そこでスシは見つけたのだ。

新しいテラスに降り、ビールを頼み静かな気持ちでペペを待った、ペペは金髪の女性と話は続いている、気づかないのでスシは引き返した。少し経つとソフィアは着替えに行くと言って立ち去った。ペペは気分よく太陽に焼かれていた。スシと共に座った。

—どうだった、うまくいった？

—ええ、私達見つけるのでしたね？ 私達は何見付けましたか、ええ、私達はもう見つけたのです。

—何だって？

—見てください、この紙です。

—何と書いてあるの、書かれていることが理解できない。

—ええと、XZUHJRS-16.確かにヘススの手帳に書かれてものと同じです。

—何と、好奇心を駆り立てる！ペペは言い、考えにふけた。

—何でしょうね？これはコードです。確かに、然し何でしょう。

—ああ分かった、スシ、今私は持っている。飛行機の予約。ねえ君はすぐに君の部屋に行きなさい、イベリア航空に電話して。出た人にコードの番号を言いなさい、彼らに飛行機の時間を忘れたと言いなさい、分かった？そして、もし君が誰かが尋ねたらソフィア モデナと言いなさい。

—急いで戻るわ。偉大なボス。

—10分後にペペは、笑みを浮かべて彼の方へやって来るスシを見た、いつもと変わらないと思った。

—イベリアの人達は親切ではなかったわ。

—そう、その事は後で私に話して、リザーブされている、いない？